慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ゴンクール兄弟『ジェルヴェゼ夫人』 (第七～九章) (翻訳)
Sub Title	Edmond et Jules de Goncourt, Madame Gervaisais (chapitres VII-IX), (traduction)
Author	山本, 武男(Yamamoto, Takeo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.76 (2023. 3) ,p.123 (10)- 132 (1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20230331-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

 この著作物は著作権法によって保護されています／ This content is protected by the Japanese Copyright Act

ゴンクール兄弟『ジェルヴェゼ夫人』

（第七～九章）（翻訳）

山本武男

訳者まえがき

『ジェルヴェゼ夫人』は、近現代の信仰生活が孕み得る危うい一面を描き切った作品で、近代小説中でもこのテーマの先駆的なものとして特筆すべきであるが、他方、ローマの美しい風光を繊細なタッチで描写した、「観光小説」とでも言うべき一面も備えている。第七章では、夫人とその息子、その家政婦の三人がパリから移り住んだスペイン広場界隈の風景が懐かしく描写されている。現代の我々には、名画『ローマの休日』のお馴染みの場面が微妙に重なって来て楽しい。第八章では、夫人がブーケを買い求め、それを部屋に置いて暮らす日常の中で、イタリアの自然に包まれた生活により、感覚がパリにいた時よりも一層鋭敏になって行く様が描かれる。第九章では、サン・ピエトロ大聖堂も見える庭園、ヴィラ・パンフィリでの散歩中、音楽家の歌に合わせて夫人の

唖者の息子が、指揮棒を振るかの様に一輪の花を振る、美しく印象深い場面が現れる。総じて、日本人からすれば、パリの貴婦人がローマで過ごす物語と云うのは、謂わば「二重の異国情緒（エキゾチズム）」と云った関係性もあり、得難い恍惚感がある。後半に掛けては、近代社会に於ける宗教の危機を扱った主題的には深刻さもある作品だが、こう云った純粋に美学的な側面からも味わい深い作品である。

〔翻訳〕

七

可成りな疲労を伴ったその日の翌日、ジェルヴェゼ夫人は、単調な規則正しい生活、即ち一寸した買い物と、急ぐことのない散歩で区切られる生活を始めた。

起床すると、八時半に服を着て、朝を楽しもうと、日光が暑く明るくなる前の約二時間ほどの間は散歩をする。教会へ、古代の痕跡へ、市場へ、この博物館のような街の中、遺物、彫刻、装飾、偉大な創造主の像の大理石の足かとも思われる標石等々それらのお陰で足取りや視線を止めざるを得ない、あちらこちらの場所へと夫人は赴いた。パリから、その近代の切り石から、その新しい石材から、その芸術性乏しき都から去って後、このパリ女は、幾世紀もの傑作と貴重な破片によって建てられ、敷き詰められ、再建されたこの歴史の町を縦横にぶらつく

芸術家としての喜びを味わったものであった。

夫人はあの絵のように美しい、古(いにしえ)の城壁、中庭、宮殿、廃屋、壁面に心惹かれていて、それらを見て行く合間に時として、緑葉、雑草、茴香(ういきょう)の髭根(ひげね)で花飾りの様に縁取られた果物屋の暗い空間がぽっかりと開く様に現れたりし、粗野ながら若々しい何者かの口を想像したりもした。いろいろな場所で夫人は絵に出くわし、医者たちに要求され、説得される儘に、あのように絵を描くことを放棄したこと、自分の人生で最も尊い趣味をあのように犠牲にしたことを後悔した。そこで大抵、彼女は「珍品」通りたるコンドッティ街を通って帰って来ることにしていた。夫人はモザイク画や宝石の商店の前、古代のガラクタでごった返した古物商の店頭陳列品、エトルリアのランプ、マジョリカ陶器、虹色に輝く涙壺(なみだつぼ)の破片、古い硬貨の乗った木の小皿などで混雑した埃まみれのショーウインドーの前で立ち止まったものである。夫人は胸像、フィレンツェ製のキャビネット、斑岩製の小箱、大理石や煌めく黄金の品々が埋(うず)もれた、これらの薄暗いごった返した店内を掘り返すのを常とした。屢々彼女は、店内で簾の役割を果たしている絹の粗布で出来た青色、もしくは褐色の網を持ち上げながら入って行ったものだ。ある品をひっくり返してみて、値切り、買って帰ったりもした。

夫人は昼食の時間たる十一時前には、決まって帰宅することにしていた。ゆっくりと昼食を取ることで、恋人同士の食事の様なこのテーブルを挟んでの息子との差し向かいの時間を引き延ばしていた。昼食が済むとピアノを弾くのが彼女の習慣で、ピエール＝シャルルを服の儘そのベッドに寝かしつける為、連れて行こうとオノリーヌがやって来るまで続けた。ここからの時間だけは、活き活きとした自分だけの場所に身を落ち着けることが出来た。そこで陽のあたる数時間を過ごし、観念のまどろみの様な午睡(シエスタ)のぼんやりとした夢見心地のなかで、その緩慢な時の流れを満喫した。実際、部屋の薄暗がりの只中で、光の小さな三角形が揺れる開かれた窓の下部の引戸錠の鎌の上までだけ少し持ち上げられ乍らも閉じた儘の鎧戸によって作り出された、このぼんやりとした薄明

りの中で目は開きつつも殆ど微睡んでいた。

夫人は時折、鎧戸の細長い薄板の隙間からスペイン広場の移ろい易い光景や、時の経過に従って右側の大きな建て物の影によって徐々に押し遣られて行くトリニテ・デイ・モンティ教会の大階段の上に打ち遣られた一日の進行を眺めていた。銀色の噴水は上がりまた真珠の白さ以て船を模した、昔のテーブルに置かれた高位の人物向けの舟形の容器を思い起こさせる、泉の黒い噴水受けに落ちていた。その傍には寝そべった男たちが泉の余白を埋める様に眠りこけていた。そこには百合の花の紋章の付いた背の高い里程標の頂きを支えにし、分厚い布製の天幕を張った水売りの店舗があった。階段の上を、ローマ女たちが頭上に小さな包みを乗せた儘、ゆっくり、バランスを崩さず、彫像の様に昇って行き、他方、「モデル女」たちは座った儘、五十バイヨッコでポーズを取る時間を待ち、また売り犬らは石段の穴に結び付けられた自身の綱を引っ張っていた。

四時になっていた。広場から呼び付けられた馬車は、ジェルヴェゼ夫人をピンチョの丘まで運び、二時間散歩する間待ち、夕食に連れ戻した。大抵、夕食を済ますと、夫人は外出せず、窓辺に佇み、小さく成りゆく広場の賑わいに耳を傾けていたものだった……。

少しずつ、トリニテ・デイ・モンティ教会の二つの鐘楼が、淡く青い空を背景に、薄ら白くなっていった。ジェルヴェゼ夫人は息子にお話を聞かせ始めたが、息子は疲労から瞼が屢々落ち掛かり、軈てもう聞いていられなくなったが、変わらず母親の声を耳にしたがっていた。オノリーヌが部屋の闇の中へ、ローマ風の笠の付いたランプを持って来た。子供が一瞬、自身の指を「聖ペテロの啓示」や「ポポロ広場の回転噴水」の図柄に覆われた炎の先の上に翳した。

するとオノリーヌが子供を連れ去った。

ジェルヴェゼ夫人は、書き物机に向かった儘、十時までまんじりともしなかった。時には、彼女はちょっと顔

を突き出して、我が子が優美な眠りにつく様を眺めた。十時になると、夫人は床に就き、あの水の音を、ローマの、屋敷の中庭まで届く「夜」の子守歌であるあれらの噴水の清澄な心地よい響きを耳にし乍ら眠りに就いた。

八

ローマは、ブーケの街である。

コンドッティ街や、バブイーノ街の通りの角には、花屋が小さな田舎風の仮祭壇の上に、ピンチョの丘のあの低地にある、この辺り特有の色鮮やかでけばけばしい植物がファンファーレの様に這い登って来る庭園から摘んで来た許りの色とりどりのブーケを陳列していた。またそれらのブーケの隣には、ローマの「花売り女」の店で実によく見る、甘く優しい濃淡に調和した絶妙な色合いのあれらのブーケ。また更にはもうブーケを越えたこんな花束、即ち花盛りのバスケット、羊歯を敷き詰めた上に置かれた、薔薇を編んで作った取っ手が両方に付いた小さな燭台置き、一輪の白いライラックの枝が飛び出して丸くなっている白椿で出来た取っ手のない籠、または薄布の如く軽やかなアザレア、花の微風（そよかぜ）、花の微粒子の如き「イーダ」と呼ばれるあの小さな花の幾つかのバスケット。

毎日、ジェルヴェゼ夫人は、これらのバスケットの中の一つを手にして、日課の朝の散歩から戻る様にしていた。花たちは、日中、夫人がいる部屋の中に花開いていたものだった。そうして一日の終りには、それらは心地よい甘味さの中で、消え掛かった香りと共に、恰も臭覚に訴える永遠（とわ）の別れがそれらの色褪せた色彩から放たれるがごとくに死にゆく。聽てこのブーケは、ジェルヴェゼ夫人が生きて行く上での必需品となり、彼女の傍に息衝き、その部屋を明るくする、彼女の孤独に寄り添う女友達の様な存在となった。艶々と輝く椿や、黄色い中心

に一滴の血を垂らした様に花弁の端が萎び始めた薔薇を眺めていると、夫人の両眼は喜びを覚えたものだった。花の鮮やかさ、陽気さ、照り返し、軽やかで穏やかな自身の生活、日の光と空の色の非物質性、ジェルヴェゼ夫人はそれらを、その時まで一度も、そこで感得する様には身に染みて感じた事はなかった。またこの知覚の喜びは彼女にとって、まったく新しくて思い掛けないものだった。フランスにあっては、女という全ての女同様、夫人はよく花に囲まれていたものだが、この様な花の生気の発散を感じた事は絶えてなかった。ローマ滞在以降、他の沢山の知覚の先鋭化と併せて、自身の中（うち）に感じられる様になっているこの印象の洗練に彼女は驚かされていた。太陽に近い諸国民や国々には、大地がそこにただで与えている天然の事物、光彩、爽やかさ、素敵な木立、美しい空、何気ない幸福感の単純な魅力を味わい抱き締めるのにより向いた、他所の土地よりも感じ易い体質が与えられているのではないかしら、と彼女は思った。夫人は、ローマに来て間無しのある晩、とある小さなカフェの入り口で飲み、今迄に口にした中で一番美味しい飲み物の様に味わったコップ一杯の水の事を思い出していた。こう云った暑い国々には、この様に、寒い国々では知る由もない土壌と気候のあらゆる種類の小さな幸福、あちらこちらに皆の為に流れる不思議な「幸福の水（アクア・フェリーチェ）」がある様だと彼女には思われていた。そして日に日に、夫人は自身の生活の些事が、自分にとっては、恋愛しているときに取るに足らないことが持つのと同じ楽しみと喜びを得て行くのが感じられていた。ここ南欧に於いては、あらゆる感覚が洗練され、繊細で、詩的になっていくのだった。

九

この気分、ローマ滞在の何週間目かに鋭敏で洗練された資質が感じた自然な喜びへのこの解放感ゆえに、ヴィ

ラ・パンフィリへの訪問は、ジェルヴェゼ夫人にとって歓喜と言えた。

古代の石棺を応用した植え込みがあり、古の遺骸の跡の空洞から棘のある茂みが屹立している、入口の門の下を、夫人の乗った小型四輪馬車は通り過ぎていった。そして、高くて、密で、薄暗く、あちらこちらに、小さな日の光線が点在し、それらがすべすべした黒い葉の上に落ちて光るひんやりとした雨を思わせる、緑葉の穹窿の下に身を置いた。森は、何時も開いており、左や右に、アロエの生垣、芝のビロードの様な渓谷、鶏頭の輝く茂み、煌めく芝地、大地から飛び出た石の先端の上に佇む碑文に影が揺れ掛かっている片隅、草叢と古代の廃墟と花咲く灌木から成る斜面が、公園のあの魅惑的な奥地、そのイタリアの笠松が王冠の如くに居並ぶてっぺん、紺碧の空を背に開花し丸みを帯び、互いに寄り沿った巨大な花束を思わせる、木々の段々によって閉ざされたあの展望へと昇って行く様子が目に入る。そして時々、野原の上の道の曲がり角で、サン・ピエトロ大聖堂の思い掛けないほど大きな円蓋が、隙間越しの眺望に縁取られて現れ、空への視界を遮るのだった。

この様にして、大きな並木道を通って、幾体もの半身像、全身像が貼り付き、隆起が丸みを帯びた浮き彫りが全面的に施されたあの壁面を持つ、ヴィラの小さな邸宅へと至った。そのアルガルディの珠玉の傑作は、強烈な日光と生い茂った葉叢の間で白く輝き、十四世紀フィレンツェの金銀細工で装飾された収納箱の石膏で出来た雛型に似ていた。そして、そこから、ヴィラの前には、イタリア式庭園、イタリアの素晴らしい庭園が、その荘厳さ、その華麗さ、その勝利の歓喜、その陽気な植生、その大掛かりな建築物、そのこの上ない幸福、喜び、愛の壮麗さの中で、伸び、広がっていた。とある教皇の紋章付きのテラコッタの大きな壺が並べられたテラスの下の、砕石を敷いた上に配置され、波打つシェニール糸の様な黄楊の縁取りに囲まれた、アラベスク模様の小ぶりな花壇越しに、夫人は、自然の中に邸宅の美を溶け込ませる階段や手摺り、彫像や柱廊の意匠や、最早、葉のない花だけから成り、紫、白、金茶色の色鮮やかな花が、網状に開いて這い上っている、あの装飾性豊かな大壁や、時

の経過に半ば浸食された子供たちの像に満たされ、荒々しい水流が落ち掛かるあの噴水や、あの流れる水、あの淀んだ水、檸檬の木々の畔のあの小さな湖の中央にある二本の木が生えたあの島を見渡した。この様な幻想的で恍惚感を齎す風景全体は、ジェルヴェゼ夫人には、以前、何かの詩の中で既に目にした事がありそうな、空想の風景、理想の場所と感じられた。彼女は、自分がタッソーの詩の中にいると感じると、詩の中のアルミードの庭の記憶が頭の中に蘇った。

夫人はテラスに肘を突いた。日中の風はよく戦ぐが温かで、そのローマの風は絹の布地の肌触りを以て、揺れ動き、擽る様に皮膚に優しく触れ、その微妙で、清々しく、軽やかな微風は、北方の憂鬱な感性に影響した。夫人の周囲では、そこにある全てが纏っている様に見える幸福な外見、至る所で喜びや壮麗な平穏から立ち上って来るもの、詰まり万物が持つ静謐さが彼女の内面に瞑想的な没入を齎し、その中で、自分自身から解放され、周囲の心地良さに身を軽く委ね乍ら、夫人は暫しの間、自身の思念から解放されて、魂を無気力に浮浪させ、弛緩し、寛いだ儘でいた。

それから夫人は庭園に降りたが、そこではとても驚かされた。此方には、緑の堂々たる楢の木があり、樹皮の上には、金属の緑青を思わせるものや、百歳になる獣の皮ならかくやと思わせるざらついた感じがあり、枝から出た新芽が行方を塞いでいたが、それ自体は鈍い緑色を帯びて、その下の噴水の絶えず揺れる反射に照らされている別の木のものであった。また彼方には、小石の敷き詰められた岸壁の回廊に、その葉と蠟を思わせる花を押し付けている椿の垣根。日の光が燦々と照り付ける緑の絨毯の真ん中には、大理石の柱が棗椰子の前で白く熱せられており、ローマ軍がリビアのオアシスで最後に行き着いた場所の里程標の事を考えさせた。より遠くには、付け柱、手摺、壁龕を伴う、石で出来た半円形の壁が、そこに沿ってうねうねとしたユッカや棘の目立つサボテンを自生させ、逆立ち乱れる樹墻と化して丸みを帯びていた。そして噴水が爽やかに噴き出し、煌めきつつ葦の

叢林を濡らし、その槍を思わせる先端からは潤いのある光が滴り落ちていた。この様にして夫人は、公園の端の、傾いた大きなイタリア傘松が、一列に、隙間ある壮麗な身廊を思わせる様で聳え立った、よくある列柱の如き所に到着した。そして、灰色の幹、紫の枝が交差して織り成す天蓋式の日傘、苔の色を思わせる、そしてまた灰色を帯びた緑色から成る暖色の青葉を持つ、この記念建造物風の大きな林の下を夫人が進んで行くに従って、イタリアのテラス、宮殿、教会、丘の上等々にまっすぐ立って砂漠の遊牧民の様にも見えるこの国のあの椰子の木々の堂々たる優美さ、オリエント風の伸びやかさが、その目に止まった。それらは夫人には、太陽の木、豪奢な木、表象としての木の様に現れ、それらの木々の下の日陰に避難すれば、デカメロン風のペチコートが何時も思い出されて来そうに思わせつつ、その梢は青い空を持ち上げ、遠退かせ、明るくしているかの様な特異な錯覚に視覚を陥らせるのだった。

子供は、進み、歩き、草の中に何かを探すのにも疲れ、二十歩ほど後ろでもたもたしていたが、そのとき、突如、その母親がオペラの一齣を歌うイタリア女の声のする方に顔を向けた。それは、幾人かの足を止めた散歩者の輪の真ん中で、みすぼらしくもきちんとした身形をした女性で、その背後には、ヴァイオリンを手にしつつも音を鳴らしていない老人が佇んでいた。そして、松の木の切り株に座った歌い手たちのすぐ傍に、ジェルヴェゼ夫人は、自身の息子が、小さな手をその頭上に掲げ、指揮者の指揮棒の様に、空中に一輪の花を巡らしつつ、歌の拍子を取る様子を目にした。誰もが彼の方を向き、彼の美しさ、彼の視線の深み、彼の眉の上、額に現れた白熱、その突然の知性と情熱の閃き、風が吹く中で、偉大な芸術家の歌に於ける、本の小さな存在のこの種の高揚に目を見張っていた。そして老人でさえ、重々しく悲し気な、老いた歌い手の表情をして、子供の手の動きを追い、自身の若き日の奥底からと云った感じで、陽気に心動かされ、目を細めて、彼に微笑み掛けていた。

（つづく）

翻訳は、以下に拠った。Edmond et Jules de Goncourt, *Madame Gervaisais*, Gallimard, coll. Folio, 1982, p. 84–92.